

◎特集
井上孝治の
ファインダー

井上孝治の生涯をたどったフランスの映像作家
ブリジット・ルメヌさんに聞く

Interview with Brigitte Lemaire

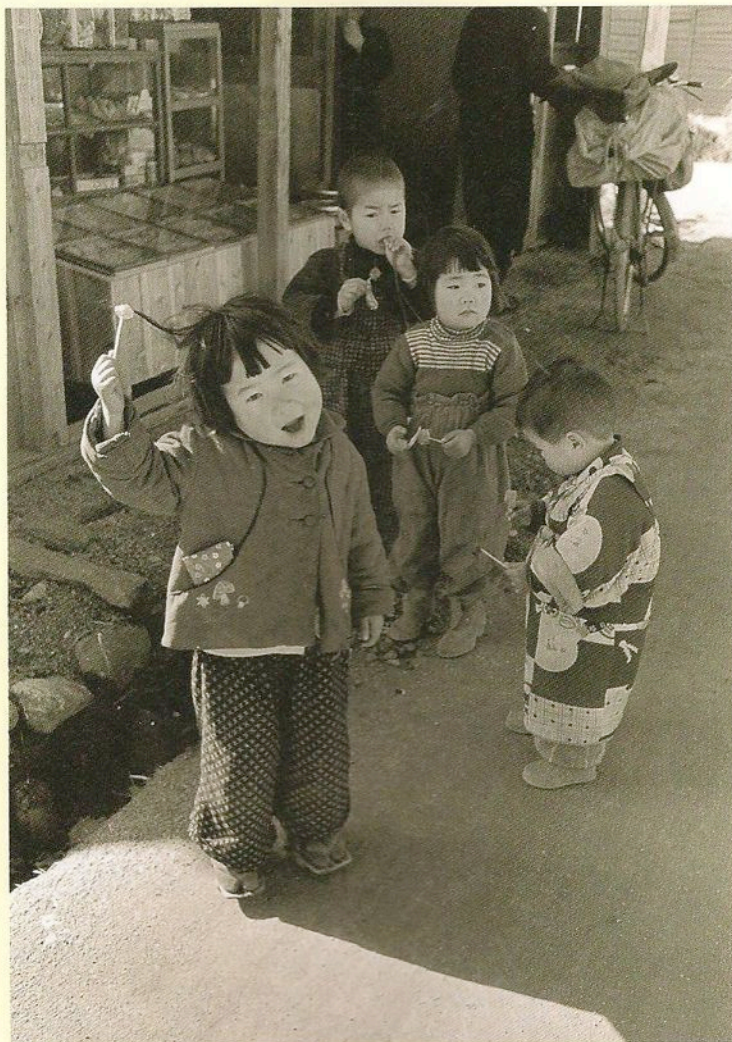
Interview with Brigitte Lemaire, a French image producer
who has traced the life of Inoue Koji



視覚の知性を感じさせる 普遍的な写真。 彼の世界を自分なりに 表現したかったのです

井上孝治さんに対する海外での評価の高さは、彼の作品の普遍性を物語るものだ。フランスの映像作家ブリジット・ルメヌさんも彼の作品に感銘を受け、1996年に19分のモノクロ映画『私を見てください。私もあなたを見ます。聾者の写真家井上孝治』、98年にはドキュメンタリービデオ『井上孝治——表象を超えた写真家』を発表している。彼女が井上さんの作品に初めて触れたのは93年のアルル国際写真フェスティバル※1。井上さん本人はすでに故人となっていただけに、純粋に作品的興味から制作を決意したことになる。彼の写真のどこに魅力を感じたのか、来日したルメヌさんに話をうかがった。

※アルル国際写真フェスティバル
1970年から毎年夏に開催されているアルル国際写真フェスティバル。井上さんは93年に招聘を受けていたが、その年の5月に井上さんは死去。アルル訪問は果たされなかった



音楽にも似た イントネーションで 語りかけてきた写真

——井上孝治さんの写真と出会ったのはアルルの写真フェスティバルとのことですが、それを見て何を感じましたか。

「私に語りかけてくれるような気がしました。日本で撮られた写真ですから、私の知らない世界なのに、かつて自分で観たような、そんな世界を感じました。彼がろうあ者であることは写真祭のカatalogなどで知っていたのですが、実際に写真を見ると普通の写真とはまったく違うという印象が強かったですね」

——その違いとは何だったのですか

「ひと言で言うと、顔の表現が違います。ろうあ者とのコミュニケーションでは表現にイントネーションを付けなければなりません。表情や表現の強弱、いうなれば音楽にも似た強弱をコウジ・イノウエの写真のなかに見ることができたのです」

——その写真祭の前に彼は亡くなっていたわけですが、彼をテーマにした作品を制作しようと思われたのはどのような理由からですか。

「当時ドイツとフランスのろうあ者の芸術家をテ

マにしたフィルムを作ろうとしていました。そこに挿入することも考えたのですが、彼の写真にとっても強い感銘を受けましたので、彼自身をテーマにフィルムを作ったほうがいいと思ったのです」

——1作目の映画『私を見てください……』は全編井上孝治さんの写真と、手話で構成されています。あのような表現は以前から採られていたのですか。

「ろうあ者の俳優に出演してもらい、手話を美しく見せる必要があると考えていましたから。それに、イノウエの業績を讃えるといいますか、私自身が受けた感銘を強く表現したいということで、この手法を使いました。残念ながら手話については、フランスでもドイツでも、それから日本でもあまり詳しく知られていません。しかし、本当は非常に創造性の高いコミュニケーションであることを知ってもらいたかったのです。もうひとつは、俳優が手話で演じる以上にイノウエの写真には普遍性があり、世界中どこでも共通するであろうと考えていたからです。その彼のメッセージを最初のフィルムでは伝えなかったのです」

——2作目の『井上孝治——表象を超えた写

真家』はドキュメンタリー形式を採られましたか。

「イノウエの家族に会いたかったし、彼が実際に写真を撮った場所も見てみたかった。ドキュメンタリーという形になった理由はそれに尽きます。それに他の写真のネガも見たかったものですから」

——福岡という土地も彼の代表作『想い出の街』の頃とはだいぶ違っていて驚かれたのでは。「最初の印象ではまったく違うと思いました。別な場所に来たのではないかというくらい違っていて、ぜんぜんわかりませんでした。ただ、何回か行くうちに、確かに街は変わったのだろうが、そこに住む人間はおそらく変わっていないと思うようになりました。考え方そのものは、イノウエが撮った写真のなかの人々と変わっていない。そう考えるようになったのです。彼の息子さんであるハジメ・イノウエにはいろいろな話をしていただいたし、太宰府天満宮などにも案内してもらいました。イノウエの家族というものを、非常に強く感じましたね。海がきれいだったのも印象に残っていますし、そうそう、イノウエが好きだった阿蘇にも登ったんですよ」

〈視覚の知性〉をテーマに 3作目の撮影も進行中

——井上さん本人と直接面識はないわけですが、ルメヌさんは彼がどのような人だったと考えているのですか。

「もちろん彼自身の立場になることはできませんので、私のなかではということになりますが…。彼は知性が高く、いろいろなことに興味を持っていましたし、常に人とのコミュニケーションを持ちたいと考えていた人だったと思います。とくに〈視覚の知性〉が非常に高かったと考えていますので、それをテーマに今沖縄で撮影しているところです。聞いた話なのですが、彼は写真を撮ることしか考えていなかったようで、それを奥様が補って生活を支えていたそうですね。そういう部分があったけれども、彼はやはり芸術家だったのだと思います。また芸術家である以上に、ろうあ者のことを考えていた人だとも思います。おそらく日本だけではなく、世界中のろうあ者のことを考えていたのではないのでしょうか」

——〈視覚の知性〉というのは、ルメヌさんが追求するテーマと共通しているのですか。「追求していきたいテーマです。なぜなら、私自身、ろうあ者である祖父母に育てられましたから。今、香港をはじめとして世界中でろうあ者の視覚の知性というものが注目を集めています。彼らの知性は、建築家やチェス競技者、あるいは

は数学者など、最初にイメージを持ってから仕事を進めていく人々のそれと共通していると私は考えています。そして、手話も究極的には感性を表現できる手段だと思っていますから、私自身こうした方面での作品を作っていきたいと思います」

——最初に井上さんをテーマにした短編「私を見てください。私もあなたを見ます」という印象的なタイトルも、そこに由来するわけですね。

「当然のことですが、手話の世界ではお互いを見ないことには話が通じません。小さいころから学んできたことですし、やはりこの世界についてどうしても説明しておきたいという思いもありましたから」

——選ぶのはむずかしいと思いますが、彼の写真の中で一番好きなものは。

「町の名前はわかりませんが、たぶん福岡市の隣の町で子供を撮った写真が気に入っています。飴売りの棚の前に子供がいっぱいて、その後ろではお酒も売っていて…。渾然一体となったなかに子供たちがいる。そういう作品です。彼は子供の写真をよく撮っていますが、子供の表現は非常に自然ですし、直接的です。それが彼の世界と共通していたのだと思います」



第1作スチール／「私を見てください。私もあなたを見ます。」のワンシーン。手話で演技をする主演俳優の Levent Beskardés さん



井上一氏と／98年12月、ルメヌさんは「表象を超えた写真家」の撮影で初めての来福。井上一さんと記念撮影

"A collection of universal photographs reflecting Inoue's visual intellect... I wanted to reproduce his world through my vision."

Global acknowledgement of Koji's works demonstrates well the universal quality of his photographs. A French image producer, Brigitte Lemaire, brought to the world "Look at Me, I Look at You, Koji Inoue, a Deaf Photographer" in 1996, and "Koji Inoue, Photographer beyond Signs" in 1998. Lemaire first encountered Koji's photographs in 1993 at the Artes International Photography Conference. We had an opportunity to interview Lemaire during her visit to Japan, to see how Koji's photographs have intrigued her.

Photographs that spoke to me with musical intonation

Q: What was your impression when you saw Inoue Koji's photographs?

A: I felt as if his photographs were talking to me. Although they were the pictures of scenes of Japan that I was not familiar with, I felt as if I had actually been there. I knew that Mr. Inoue was hearing impaired to begin with, and in my first encounter with his photographs I had quite a different impression compared to other people's work. Actually, it was the expressions of the subjects in his photographs. I know that certain intentional gestures are needed when communicating with the hearing impaired, and I think I saw this different intonation in facial and other expressions in his photographs, which can be identified as a stress in music.

Q: Your first feature on Inoue Koji, "Look at Me, I Look at You, Koji Inoue, a Deaf Photographer" consists only of Koji's photographs and sign language. Have you applied such a method of expression before?

A: I had wanted to present sign language beautifully, with hearing impaired actors. Moreover, I wanted to faithfully demonstrate the inspiration which I received from Inoue's photographs. Unfortunately, sign language is not very familiar to people, say in France, Germany, or in Japan, and I had hoped to introduce its ability as an efficient and creative tool for communication.

Q: Your second feature, "Koji Inoue, Photographer beyond Signs," was presented as a documentary.

A: I wanted to meet his family, and see the actual places of his photographs. And that's why I decided on a documentary.

Besides, I had wanted to see Inoue's other negatives.

Q: The Fukuoka of today must have given you quite a different impression from Koji's photographs of "Omoide-no-Machi."

A: Yes. My first impression was that it was completely different. However, as I have returned to Fukuoka a few times, I've come to feel that things perhaps haven't changed, even given the transition of the city.

Based on the theme "The Visual Intellect," the third feature production is now in progress.

Q: Although you have never met Inoue Koji in person, how do you perceive him?

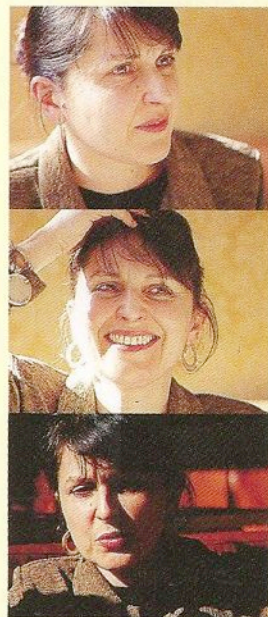
A: Naturally, I can never put myself in his place, so I can only speak of my interpretation. I think he was a man of high intelligence who had diverse interests, and sought constant communication with others. Inoue particularly excelled in "the visual intellect," and we are shooting another feature on him right now in Okinawa, based on this theme. I think Inoue had a concern for hearing impaired persons, more than being an artist. Perhaps, he was sympathizing with all the hearing impaired people of the world, not just in Japan.

Q: Is "the visual intellect" the theme that you have been pursuing?

A: Yes. I would like to pursue this theme because I myself was raised by hearing impaired grandparents. Presently, the visual intellect of the hearing impaired has been attracting attention in Hong Kong particularly, and in other parts of the world. I believe their intelligence has characteristics in common with the intelligence of, say, architects, chess players, or mathematicians. I would like to produce works in this sphere.

(プロフィール)

フランス生まれ。社会学者。美学博士号を取得。報道雑誌「レクスプレス」誌で編集などの仕事を経た後、88年からドキュメンタリーの映像作家として活躍している。障害者や児童虐待などを扱うドキュメンタリー映画を数多く制作。特に「耳の聞こえない人の文化」視覚的知性を伝えることをテーマとしている。ろう者の祖父母に育てられたことから、自らの母語は「手話」だと言う。主な映像作品は…



- 1990, "Les murs ont des oreilles" (聴覚の障害)
- 1994, "Une seule vie, un seul corps" (たったひとつの生命、たったひとつの肉体)
- 1995, "Deaf to the image" (聴覚障害者の映像)
- 1996, "Look at me, I look at you, Koji Inoue a deaf photographer". (私を見てください。私もあなたを見ます。聾者の写真家井上孝治)
- 1998/99, "Koji Inoue, Photographer beyond Signs" (井上孝治一表象を超えた写真家)